

ふきふき一はものねむりきていふやうなはけりやうや  
場

進まふ小原の里よりいふやうや

右為忠朝臣家集以村升敬義本書属一校了部立等不審如  
後舊貫

ふきふき一はものねむりきていふやうなはけりやうや  
進まふ小原の里よりいふやうや

武部六輔菅原左良朝臣集

花新浮水

教ふ花をいふは花のまゝに神乃匂入殿

花新浮水

水もふきふきとて花のまゝに神乃匂入殿

三月廿夜

春のふきふきとて花のまゝに神乃匂入殿

夜深待郎公

かくはりてふきふきとて花のまゝに神乃匂入殿



子規啼血  
月夜哀吟

山家郭公

都々々々々々々々々々々々々々々々

臨曉有涼

上  
秋  
乃  
風  
之  
聲

山家早秋

やう里のくまの葉を吹く風の中をふたふた

七夕

とて原くわせきんぬるききんぬるききんぬるき

同

天何所如人何所如也

月与持乞

月星秋夜多雲  
雲月星秋夜多雲

九月十二夜對月憶秋

ついでに、  
すゝめ、  
あまのこ、  
おとこ、  
おんな、  
秋の空

月  
契  
子  
秋

山陰より月夜のふるふを裁ふを秋のう光とて之

月照

子之文錦云足金散之紅葉月玉環之珍珠

經日對菊



一、漢書卷五  
 秋夜陪吏部大文章詠臨曉聞  
 一、漢書卷五  
 秋夜陪吏部大文章詠臨曉聞  
 九月十九日詠終夜見月  
 名一、漢書卷五  
 歌即景山  
 初冬於羽林後系次將文詠德社對景

山路晴  
 夜思時  
 寄拙衣  
 寄拙衣



卷一百一十五

諸君  
故東都大王金近或如卿問予為其婦介而女  
未成配偶之礼王忽催告別以悲女以一首被  
授予其詞曰

松樹蔭池水  
 法華經神力品  
 松樹蔭池水

松樹瘞池水

君はくひなき玉ふりて池より花をのぞくは

松樹迎客

うねりしきり来とくふふふせぬ人の名はうねり  
冬日空居る

紫式部の書はふしやうにあそびをかたじけなくしるべしとあるが、社名也

松樹盤遊

いふを繋りて美しむ故森名の年小生もふ月乃禰を  
夏日於古武將軍小野別業詠池水久澄  
和歌

和歌

池水也ひやうきふくをたふすは



藤原基俊家集上

右在良朝臣集雖多不審依無類本不能校合

春のあけふは花の散るを  
見れば心もなほおもはれ  
けしきもなほおもはれ  
けしきもなほおもはれ  
けしきもなほおもはれ  
けしきもなほおもはれ  
けしきもなほおもはれ  
けしきもなほおもはれ  
けしきもなほおもはれ  
けしきもなほおもはれ

藤原基俊家集上

正月朔日女もふはる

物にあらはれし心もなほおもはれ

同ー一りも物もなほおもはれ

はるもなほおもはれ

初春のあけふは花の散るを

見れば心もなほおもはれ

けしきもなほおもはれ

老翁くみえむいぬ鶴がわかれを

七日のあけふは花の散るを

藤原基俊家集上

藤原基俊家集上